

平成29年度 山形県青少年育成県民会議総会 5月30日（火）県庁・講堂

今年度の山形県青少年育成県民会議の総会が、上記日程で開催され、今年度の事業計画等が承認されました。

柳谷豊彦会長はあいさつの中で、

- ・「大人が変われば子どもも変わる」県民運動と「いじめ・非行をなくそう」やまがた県民運動は、二つの大きな運動として成果をあげてきた。
- ・いじめの問題が大きくなっているが、真正面から向き合うことが大事である。
- ・県民会議として、全県での活動展開と地域に根ざした活動展開が歯車として噛み合うようにしたい。
- ・会員の拡充に重点を置きたい。そのことで、見守る目、育む芽を多くしたい。



（長年にわたり県民会議の役員を務められた方4名に感謝状が贈呈されました。最上地区からは、佐藤理峰氏、矢口信一氏（写真中央）の二人がいただいています。）

- ・大人は、子どもに自分のコピーになることを求めるのではなく、これからの時代を生きる新しい人をつくるという意識をもつ必要がある。

等のことを述べられています。

議事終了後、山形大学地域教育文化学部の安藤耕己准教授から「子ども・若者の〈居場所〉の意義～放課後子ども支援とも関わらせて～」の演題で講演をしていただきました。安藤先生の話された内容を、一部ですが紹介します。

- ・今の子どもたちには、学校と家庭以外の居場所が必要である。
- ・子どもの権利条約には、「生存の権利」「保護される権利」「発達の権利」「参加の権利」などが盛り込まれているが、先進国で重視されたのが「参加の権利」。
- ・子どもたちが、役割参画⇒意見参画⇒共同決定参画⇒子ども主導参画⇒大人を巻き込む参画、のようにより高いレベルで参画できるようになっていくとよい。
- ・大学生に、「今までの人生の中で、自分に影響を与えた人」を聞くと、「教師」と「親（家族）」の大きく二つに分かれる。第3の人（「意味ある他者」）を挙げる学生はほとんどいない。
- ・いろいろな大人が子どもと一緒に、時間と場を共有していく社会になることが求められる。（学校からこぼれ落ちる子どもは、どこに居場所があるのか？）

活動紹介

中高生は、地域を共に支える「パートナー」 ～最上地区の青少年ボランティア活動から～

最上地区には、中高生が主体となって活動するボランティアサークルが多くあります。学校単位でのボランティア活動も活発ですが、自分の地域でボランティア活動をする「地域」を単位としたサークルがあることが特徴です。地域の様々な世代の人たちと関わりながら、その地域に根差した活動を展開しています。最上教育事務所では毎年、交流とボランティア実践を目的に、「最上地区ヤングボランティア交流会」を開催し、仲間と企画を考え、協力して、ボランティアで最上を盛り上げようとしています。

ボランティアを経験した中高生は、多くの出会いからやりがいを感じ、また次の活動へとつなげています。各地域で子どもの数が減り、サークルの仲間も減少傾向にある中、ボランティアや地域に出て活動することの楽しさをより多くの人たちに伝え、仲間を増やして活動を充実させていこうとしています。

地域での出番があり、やりがい・達成感を感じる中で、中高生の自己有用感が高まります。中高生が、地域の中で地域の方々と「パートナー」として共に活動する場が増え「将来を担う地域の一員」として活躍できるように、今後も支援していきたいと考えています。（最上教育事務所社会教育課）



（平成28年度ヤングボランティア交流会の様子）